

2022年横浜ナザレン教会・復活後第四主日(5/15)礼拝

「神の祝福に与らせるために」

使徒言行録第3章17節から第3章26節

【聖書】

使徒言行録3:17ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。18しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。19だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。20こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。21このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。22モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。23この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』24預言者は皆、サムエルをはじめその後に預言した者も、今の時について告げています。25あなたがたは預言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と、神はアブラハムに言われました。26それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。」

1 ペトロの説教後半

最初に今日の聖書の前を振り返ります。イエスさまの弟子であるペトロとヨハネがエルサレム神殿に祈る為にやって来ました。そこでは、生まれつき足の悪い男が、物乞いをしていました。自分の運命に縛り付けられた男。この男が、ペトロとヨハネから何かもらえんと思っで見詰めていると、ペトロは言います。「私には金や銀はないが、持っているものをあげよう。イエス・キリストの名によって、立ちあがり、歩きなさい。」そして、彼の右手をとって彼を立ちあがらせました。生まれてこのかた、足に力が入らずに立ち上がれなかった男は、足やくるぶしがしっかりして、躍りあがるようにして立ち、歩き回ります。本人は喜びのあまり、ペトロとヨハネの周りを跳ね回り、ついて回ります。これを見た多くの人々は、あまりの出来事に吃驚仰天。何が起こったのか！と、ペトロとヨハネの所へと大勢の群衆が駆け付けます。集まった人々を前に、ペトロは、説教を始めます。そこでペトロは、四十年以上、地面に縛り付けられるようにして生活していた男を解放したのは、自分達の力や信仰ではなく、神から送られた救い主であるイエス・キリストだ、あなた達が十字架に架けて殺したが、神が甦らせたキリストであるイエスこそ、命への導き手です、と語ります。

今日の聖書はこのペトロの説教の続きです。およそ2000年前、日本から遠く離れたエル

サレムに住んでいた人々、私たちとは随分と異なる人々ですが、ペトロの言葉は、現代を生きる私たち一人一人に、神の救いとはどのようなものであるか、を語りかけています。ペトロが取り次いだ神の言葉に耳を傾けていきましょう。

2 神の御業

聖書は、父なる御神は、この世界の全てを造ったお方だ、と繰り返し語ります。その最初、皆さんもよくご存じの創世記第一章は、バビロンに囚われていたユダヤの人々が、神を礼拝する際に詠唱していた式文ではないか、と言われていました。そこでは、当時、神として崇められていた太陽や月などの天体も、神が造ったものに過ぎない、世界より大きい真の神がおられ、この世界を秩序をもった美しい世界に造られた、と語っています。先週、私たちが住む太陽系が属する天の川銀河の中心にある「いて座 A スター」のブラックホールの影の撮影に成功した、というニュースが飛び込んできました。聖書の創世記が今のような形で成立してから、2500年ほどたつと言われてはいますが、その間、宇宙について、この世界について多くのことが明らかになりました。それにつれて、万物を造られた神のスケールの大きさがよりわかってきました。当時、神を天地万物の創造主として賛美していた人々が、現代のこの知識を知ったら、きっと大喜びで神を賛美したことでしょう。だって、神は、光でさえ130億年以上かかる、と言われるこの全宇宙をつくられた方、途方もなく大きな方。このお方は、百数十億年、という気の遠くなるような時を経て、私たち人間をつくられました。それは、何のためでしょうか。

ある神学者は、それは愛の為であった、と言います。神は、全知全能の方です。なんでも一人でできる方。そうであるなら、ご自身以外の存在など不要な筈です。誰の助けも要らないお方、一人で完全なお方。しかし、神はご自身とは異なる存在である私たちを造られました。ご自身の息を吹き込み生きる者とされた、とあるのは、私たちををご自身と対話できる存在として造られた、ということだと言われてはいます。何故、対話の相手となる人間を造られたのか。ご自身とは全く異なる私たち人間を愛するため、その舞台として、この世界を造られました。

父なる御神の創造の御業は、その命のエネルギーは、私たち人類を目指している、聖書を書いた人々は確信していたのではないのでしょうか。本当にすごいことです。そして、御神は、ご自身の思いを、ご自身のことを人類に知らせようと、数多くの民の中から、今にも滅びそうな弱く小さいイスラエルを選び、その先祖であるアブラハムに約束します。「**地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける。**」

祝福という言葉は、私たちキリスト者はよく使います、「祝福を祈ります」。しかし、案外祝福とはどういうものであるか、あやふやだったりします。聖書で言う祝福とは、父なる御神の生命の力を豊かに受けることだ、と言われてはいます。無から全てをつくり出す命の力を神から受けて豊かにされること。その神の命の力は、神の愛の力です。神の愛の力こそ、聖い命と聖い世界を生み出します。だから、祝福とは、神からの深く強く豊かで聖い愛を受け取り、

その愛により、その愛の中で豊かに生きる、と言えるのです。

そして驚くべきことですが、私たち一人一人が、この祝福された命に与り生きることが、神がこの宇宙を作られた目的だ、と今日の聖書は私たちに語りかけます。26節「それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福に与らせるためでありました。」神の聖なる愛、130数億年以上の神の聖なる愛、途方もない愛は、私たち一人一人を目指している、まとめて一山いくら、ではありません。私たち一人一人は、皆、神にとってはかけがえのない一人一人、代わりはない、皆、父なる御神にとって、私たちは皆絶滅危惧種です。

しかし、そうであっても、神は私たち一人一人を無理やり支配しようとはなさいません。私たち一人一人の意思を尊重して下さる、私たちを自由な意志を持った一個の存在だと受け止め、接して下さいます。そのような神の在り方は、23節、「この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる」という警告にも現れています。「この預言者」とは、モーセと同様に神がイスラエルの中に起こす預言者のことであり、主イエス・キリストのことを指しています。主イエス・キリストの言葉に耳を傾けない者は、神の民ではなくなる、という警告です。つまり、耳を傾けるか、傾けないか、神の民に加わるのか、加わらないのか、は一人一人に委ねられています。ですから、二代目の神の民、生まれながらの神の民などいけません。十字架と復活の主を自身の救い主とするか否か、神の民に加わるのか、加わらないのか、は一人一人に委ねられています。まだ何も分からない幼子はともかくとして、自立した人間、自分とは別人格を愛する、というのは、その人の自由な意志を尊重する、ということ。自分の思い通りに支配する、ということではないのです。

それにしても、この宇宙からすれば、芥子粒ほどの大きさも持たず、悠久の時の流れの中ではまばたきにも満たない私たち一人一人を、宇宙より大きな御神が、尊重して下さる、考えもつかない事です。そう、私たちはこの神についてあまりにも何も知らないのです。知識がなくては正しく選ぶことはできません。だから、父なる御神は、胸の引き裂かれるような想いで、私たちに呼び掛け続けます。「私の所へ帰って来て、私のことを知りなさい。私の愛を知りなさい。この私のもとでこそ、私に愛されている命として、ありのまま生きることができ。お互いに大切にしあいながら、互いに尊重し合いながら、真に生きる命の道がある。」

3 悔い改めて立ち帰れ

しかし、イスラエルの人々には、この神の御心が分かりませんでした。自分達が神のようになりたいと思ったのです。そして、神の御許からやって来られた主イエスを十字架に架けた、とペトロは語ります。彼らは、自分達が神になろうとして、真の神を見失いました。いえ、逆かもしれません。一人一人を造り深く愛し、生かし導いて下さる方を見失った時、自分達が何者かも見失った、とも言えます。

それは、現代に生きる私たちも、全く変わりません。これだけ科学が発達しているのに、相変わらず、私たちは争い合っています。権力者だけではなく、自分達の利益や立場、考えを第一に生きてしまうのは、私たちも変わりません。全ての人が神を見失っています。しか

し、又、だからこそ、主イエスは十字架に架ってくださいました。そうして、神を殺そうとする者達、ご自身を殺そうとする者達を赦し、彼らの為に彼女たちの為に、父なる御神に祈られました。まさに自分の体を十字架に釘付けにしている人々の為に「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」と祈りました。そうして十字架に苦しみ抜いて死なれたのです。そのような主イエスを、天の御神は甦らせました。この主イエス・キリストにこそ、全宇宙を貫く神の愛が現れている、ということを示すためです。宇宙の創り主が、ご自身の御子をも惜みせず、私たちの為に差し出した。そこに何ものにも揺るがすことのできない、聖き愛がある。この愛のもとに立ち帰れ、と勧めるのです。

悔い改めて立ち帰る、とは、単なる反省ではありません。後悔でもありません。自分の心と身体の方角を神の方へと向き直らせることだと言われています。あてにならない自分を信じて生きていくのではない、自分を主人として生きていくのではない、正しき愛の神のほうへと向きを変え、神を主人として、神の愛に飛び込んで生きなさい、という勧めです。

足の不自由な男の奇跡で言えば、ペトロの右手、それはキリスト・イエスの右手であります。その右手に縋りつつ、力を込めて立ち上がろうとしました。この男は、古い自分、決して立ち上がれなかった自分をかなぐり捨て、ひたすら差し出されたイエス・キリストの右手を見詰めつつ、自分を信頼するのではなく、父なる御神とキリスト・イエスを信頼して立ち上がろうとしました。悔い改めて、父なる神に立ち帰るとは、神の方を向いてこの方を頼って生きる生き方へと方向転換する、ということです。

これは抽象的な事でもあやふやなことでもありません。とても具体的な勧め、アドバイスです。主イエスのみ名によって洗礼を受け、神さまを礼拝して生きなさい、という勧めです。19節、「自分の罪が消し去られるように」というのは、罪が拭い去られるように、洗い流されるように、ということであり、洗礼を示している、と言われているからです。

4 慰めの時

そうして、私たち一人一人が命の方向転換を行い、神の聖なる愛のもとに立ち帰った時、今は、父なる御神のもとで、この世界を支配しておられるイエス・キリストが再び来られる、それが慰めの時である、ペトロは語ります。20節「こうして主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。」そして、そのイエス・キリストが再びやって来る時こそ、全宇宙が、全世界が全く新しく作り直される時であり、それは昔から預言者達が語っていることだ、と、ペトロは宣言します。21節の「神が聖なる預言者達の口を通して昔から語られた」の「昔から」は、「永遠」という意味もある言葉です。神は、このことを永遠の昔から決めておられます。ですから、20節で「神のもとから訪れる慰めの時」とは、終わりの時です。この言葉には色々な意味があり、「救いの時」「休みの時」など様々に訳されています。中でも「安息の時」という訳に心惹かれます。

神が世界とそこにあるものをすべて造られた後、七日目に安息された、と言うあの安息だ

からです。神はご自身で造られたこの世界を「きわめて良い」と言われ、安らぎました。この「良い」というヘブライ語には、「美しい」という意味があるそうです。美しい、と言っても、見た目の表面的な美しさではなく、困った人を助けてあげる行いを私たちは「美しい行い」と表現しますが、そのような美しさです。神の御心という、よい目的に適った美しさを言います。そして、冒頭で私は、天の御神は、私たちと愛し合うために、この世界を造られた、と申しました。ですから、「きわめて良い」という神の安息、私たちに訪れる安息の時とは、神と私たちが、そして私たち同士がお互いに深く信頼し愛し合う、神の祝福のうちに生まれる安息、ということができると思います。

5 礼拝

しかし、それでは、私たちは、終わりの時まで真実に安らげないのでしょうか。神の「きわめて良い」という安息に与れないのでしょうか。

いえ、違うのです。私たちは、神のきわめて良いという祝福の内の安息に与れるのです。何故なら、主イエスを私の救い主と告白し洗礼を受けた者には、聖霊なる御神が降ってくださり、満たしてくださるからです。聖霊なる御神が満ちてくださる、とは、終わりの時の神と共にある安らぎの命が、時を先取りして私たちに注がれる、ということだからです。

ですが、だからと言って、私たちは完全に神の者となったわけではありません。神から引き離そう、自分達が神になったらいい、と常に誘惑する者がいる人間世界に生きているからです。だから、様々に傷つくし、時には人を傷つけることもあるかもしれません。更に、私たちは肉の体と心の弱さも持っています。疲れ切ることもあります。神を疑うこともあるでしょう。「神は一体どこにおられるのか」呻きをもらす事だって一度ではないでしょう。

しかし、だからこそ、私たちは、礼拝の恵みに与るのです。聖霊なる御神が満ちる礼拝は、主イエス・キリストが、「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**」と私たちに御許に招く声の響くところです。そこで、この世で生きる疲れをいやし、神の命の祝福に与ります。つまり、私たちは、礼拝する事でやがて必ずやって来る慰めの時、安息の時を先取りし、主なる神の祝福を受け取って生きるのです。この安息日の礼拝が、神の民を形づくります。儂い命を生きる者であった私たちを選び出し、永遠の命に、永遠の安息に、今既に与らせてくださる父なるみ神を心から感謝し、そのみ名をほめたたえます。